郷土資料 昭和五十年六月二十二日

第六十九回 史跡めぐり資料（見沼通船堀）

越谷市郷土研究会
理事 日置宗一

案内

一、日時　六月二十二日
武蔵野線南越谷駅集合
午前九時二〇分出発

二、場所　見沼通船堀
清泰寺見性院の墓
吉祥寺

三、コース　南越谷―南浦和
―見沼通船堀―清泰寺
見性院の墓―吉祥寺
―越谷

四、会費　四百円（交通費他）

目次

一、見沼の干拓と新田造成
一、見沼通船堀
一、浦和市指定有形文化財
大間木氷川神社本殿
一、大牧清泰寺
一、県指定旧跡見性院殿の墓
一、吉祥寺

見沼の干拓と新田造成

見沼溜井は寛永年間に郡代伊奈忠治が付島村から木曽呂村にかけて八分堤を築き荒川の水を堰止めて約二〇〇〇ヘクタール（箱根あしの湖の二倍）にわたり水をためたもので足立郡東南部の二百二十一村のかんがい貯水池にあてた。しかし夏は干ばつで水源が枯れ延に大雨が降ればはんらんするという村民泣かせの大沼だったといわれる。享保十年（一七二五）前年には使約令が出されるほど幕府の財政は窮迫していた。そのためには新田を開発農業を奨励して石高を増さなくてはならなかった。"米将軍"の異名で名高い八代将軍吉宗が紀州の井沢弥惣兵衛為永（勘定奉行吟味役）を招き見沼の干拓と用水の新設の下検分をかさねた踏査によって改修事業に自信を得た為永は享保十二年干拓に着手した時に為永は六十歳を越えていた。工事は利根川沿岸の下中条村の利根川本堤に樋管を設け水路を開削して星川に結びそこから大山村までは星川自然流を利用した。大山村で再び新しい水路を掘り星川と分離し元荒川との交差地点では伏越樋によって元荒川の下をくぐらせたり原市町の綾瀬川では掛け樋をつくり上を通過させるなど新しい工法と困難な工事であった。水路は溜井の北方で

東西に分けられ溜井を囲むような形で下流の用水路に接続され、これと並行して溜井の放流が行われ、更に芦川排水路が掘削された。この間一年数か月延長八十七口におよぶ見沼代用水路は領民総出動の大事業として完成し約三〇〇町歩の新田が開かれた。

当時、開拓せられた耕地は田面一反歩金二両畑は銀二十一文の価格で地元民に拂下げ当三か年々賦とせり。

見沼通船堀（閘門）

閘門とは高低二水面を連繋し、船舶をして該二水面を上下せしむる為設置する工作物の一種、為永はこの代用水路を舟運にも利用するためにかつその八丁堤の近くに芦川と東西両縁用水路を結び閘門式運河を掘削することを計画し享保十六年（一七三一）に工事を完了したこの運河は途中に二か所の閘門を設けて交互に開閉して芦川と代用水路との三メートルの水位差を調整しながら、この運河の二か所を舟が荷物を積んだままで上下することができるようにしたもので規模は小さいがパナマ運河と同じ原理でそれより八三年前に作られたものである。

この通船堀は用水路沿岸の村々の生産物と江戸からの商品の輸送に大いに役立ち昭和六年まで続けられた。

浦和市指定有形文化財

大間木氷川神社本殿

一間社流れ造り。ほこけら葺き

身舎間口二、五メートル。奥行き

二、四五メートル。廻り縁がアけられた

江戸時代前期の流れ造りの典型

として価値が高い建造物

大牧清泰寺

当時は貞観年中（八五九～七六）

慈覚大師円仁佛法有縁の地と

レここに一堂宇を創建し、十一面

観世音菩薩の像を彫刻し

護国利民の道場とされたのに始

まりこれより慈覚の二字を

とって慈ア山覚源寺と称す

末旨は天台宗総本山は比叡山

延暦寺法燈は中興、俊円（元禄

十二年没）より現住職まで三十五

世を数える。

県指定旧跡見性院殿の墓

武田信玄の姫（一五四三～四年頃）として

生れ長じて大山梅雪に嫁レたが

天正十年（一五八二）夫の歿後佛門に

入り武蔵へ移住レた後徳川家康

が深く同情して保護の手を差し伸べ

江戸城田安門内北丘尼屋敷と

大牧村に六百石の領地を賜わった

慶長十六年（一六一一）徳川二代将軍

秀忠の四男幸松丸が誕生レたが

事情あって慶長十八年三月幸松丸

生後一年十ヶ月の時秀忠の内命により生母お静の方と共に手許に引きとり元和三年(一六一七)信州高遠の城主保科正光の養嗣子となる。寛永六ヶ月の時まであが子にまさる慈愛をもって養育した幸松丸は後の会津二十三万石松平家の祖となった会津藩主将保科肥後守従正之公なり。

境内地本堂前の東南西三方に立ち並ぶ三五一基の庚申塔は昭和三十四年文化財(民俗資料)として指定されている。

吉祥寺

浦和市中尾にある天台宗の寺院。玉珠山十林院といい、開山は慈覚大師(七九四～八六四)中興は頼定といい、上野東叡山学寮の伴頭已勤僧が住職となった寺院で格式は伴頭寺である。本尊地蔵は慈覚大師傍らの弥陀は智錫大師作との伝えがあり門徒二十ヶ寺末寺五ヶ寺を有し寺領五石の朱印寺山門は浦和市指定文化財で江戸時代初期の建築桁行三、三六メートル梁間一、三六メートル。大棟門型式であるが前面の両脇に控柱を建

てる屋根は切妻造り茅葺き
軒場の組物は非常ににぎやか
となり指肘木を用いるなど桂
様を取り入られている。